



episode.10

「産研創設と忠兵衛さん」

福井 俊郎 Toshio Fukui

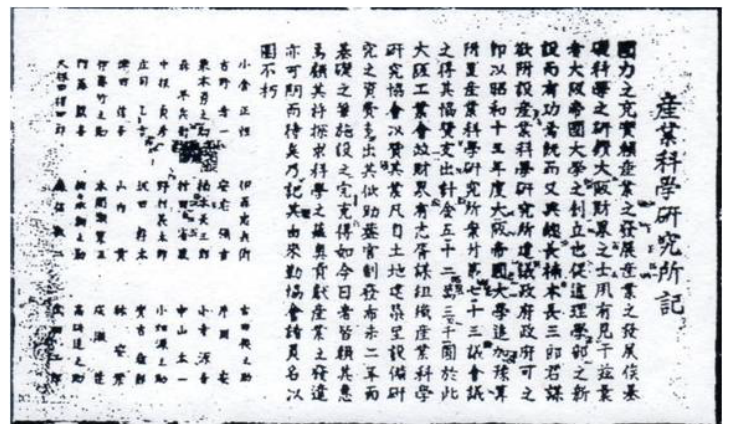


伊藤忠兵衛さん

堺市のはずれにあった産研のことを知る人が少なくなってきた。研究所の玄関正面に小さなロータリーがあり、その真ん中の植え込みに一つの石碑が建てられていた。この石碑は産研の吹田移転に伴って移設された。自然石でつくられた石碑には大理石の銘板がはめられていて、そこには「産業科学研究所記」が記されている。年月の経過と共に大理石が磨滅してきて、ほとんど読めなくなってきたために、数年前に新しくつくり替えられた。そこに書かれている漢文が難しいので、私は甲南高等学校の覚野吾郎教諭にお願いして読んでもらった。以下はその前半部分である。

産業科学研究所の記

國力の充實は産業發展を頼み、産業の發展は基礎科學の研鑽を俟（ま）つ。大阪財界の士、夙に見（けん＝見識）を有し、茲（ここ）に曩者（さきごろ）大阪帝國大學の創立を干（もと）むるなり。理學部の新設を促進して功有り。既にして又總長楠本長三郎君と謀りて、産業科學研究所を附設せんと欲し、政府に建議す。政府之を可とす。即ち昭和十三年度大阪帝國大學の追加豫算を以て産業科學研究所を附置す。案、第七十三議會に付して之を議し、其の協賛支出計金五十二萬三千圓を得。此に於て大阪工業會並びに財界有志、胥（あ）い謀（はか）りて産業科學研究協會を組織し、以てその業を贊（たす）く。凡そ土地建築より設備研究の資費に至り、其の攸助（しじょ）を多く出す。



石碑の碑文

これを読むと、「大阪財界の人たちが大阪帝国大学の創立を求めて、理学部の新設に成功した。次に楠本総長と相談して、産業科学研究所を附設することを願い政府に建議して、政府はこれを認めた」ということである。この石碑を建てたのは産業科学研究協会であり、自分たちの功績を強調したのだろう。私たちは長らく「産研は関西財界の有志が強く望んで、その絶大な援助でもって創設された」と教えられてきた。

しかしながら、最近になって『伊藤忠兵衛翁回想録』を読むと、産研は確かに関西財界の絶大な援助で実現したものではあるが、その創設をはじめに言い出したのは、むしろ当時大阪大学の総長であった楠本長三郎先生であったようである。その部分を引用してみよう（原文は仮名文字で書かれているが、一部改変して読みやすくした）。

「府立医専の国立移管問題に目鼻が付き応分の寄付もしたが、時あたかも、国民の科学教育とそれによる産業の發展が国家的要請であった。楠本先生はわが大阪大学はまず基礎教育に熱を入れて、広くよい先生を迎え入れたが、それを板につける道程として研究所をつくろうと言う。しかも、その頭領は眞島利行氏という理学部長で、稀にみる学者だと言われる。（中略）おもしろくないのはこちらで、非常に大きな予算を立てられて、今度もぜひ片棒をかついでくれと言われる。住友の総理事と商工会議所の会頭と私の 3 人で協議をした。住友の小倉正恒さんが、『忠兵衛さん、今度は君に無理を言う。いろいろのことであんたははじめお店の実情は十分に知っているが、もうここまで回復されたのだから、これこれ出してもらいたい。実は住友が出すのと同じ金額だ。銀行も喜んで賛成するようにさすから』と、当時としては予期もせぬ巨額の割当てを受けた」

時の政府は昭和 13（1938）年度の追加予算として、大阪帝国大学内産業科学研究所創設予算を計上、第 73 回帝国議会で成立する。創設費は当初計画の 670 余万円から 52 万 3 千円に削減され、さらに、政府支出金は敷地買収費 25 万円で、残りの 27 万 3 千円は民間支出金とされた。

産研に対する当初の構想は、理化学研究所をモデルとして、36 部門からなる総合理工学研究所を、7 階建て 4 つの鉄筋建物に収容するというもの。堺市東部の広大な土地を建設用地とした。この土地は当時田園の真中にあったが、正門付近は地下鉄延長線の駅に予定されていた。第二次世界大戦直前の国費多端の折にもかかわらず、強力な募金活動が展開されて、400 万円（現在の 100 億円くらいに相当するか？）の資金と 21 万 5 千平方メートルの土地を確保して、第 1 期工事として約 1 千坪の木造建物（本館）が建設された。

その後も、産研協会の基金を利用して残りの建物（研究棟など）が建築され、さらに、研究所の運営資金から人件費までも援助の手が差し伸べられた。当時の財界の力は今では想像もつかないものであり、当初の産研はまったくそれにおぶさっていたのである。産研の創設をどちらが言い出したのかはさておき、産研の初期の発展に対する産研協会の貢献は、今後も決して忘れてはならないものである。

現在産研にある楠本先生と眞島先生の銅像は、産研の吹田移転時に産研協会から寄贈されたものであるが、その折に寄付集めの世話をしたのも忠兵衛さんであった。ここで注目したいのは、忠兵衛さんとお二人とのつながりが、産研創設時に始まったものではなく、それよりもずっと以前から続いていたということである。

忠兵衛さんが 19 歳のとき、たまたま条虫（寄生虫の一種）が出たので、医師からもらった強い薬を一日絶食して飲んだところ、ひどい下痢に見舞われて意識がなくなるほどに衰弱した。深夜にあわてて往診を頼まれてやって来たのが、当時府立医専の教授で大阪病院の内科第一部長をしていた楠本長三郎先生であった。はじめの医者が投薬量を間違えたのが原因であったようだが、忠兵衛さんは数ヶ月の入院でようやく回復できた。約 10 年後のこと、ひどい腎臓炎にかかったときにも、忠兵衛さんは楠本先生に助けってもらった。このようなことを通して、二人は親類以上の付き合いをするようになっていたのである。

一方、忠兵衛さんが初めて眞島先生と出会ったのは、インターラーケンから登ったスイスの山上であった。東北大学から青年学徒としてドイツに留学中であった眞島先生は、大変に言葉数の少ない方であったが、二人はどこかで気が合ったのか、このときから親しい関係ができたようである。驚いたことには、以前に投薬量を間違えた医師は眞島先生の義弟であった。産研創設にまつわる、誠に不思議な縁の物語である。（2017 年 12 月 5 日記）



堺時代の産研（本館）



堺時代の産研（研究棟）

<引用文献>

- ・伊藤忠兵衛翁回想録（昭和 49 年）伊藤忠商事株式会社発行
- ・伊藤忠兵衛翁を偲んで（昭和 51 年）産業科学研究協会編集発行